

Topic 1

◇ 受験生だけじゃない！ 必須センター対策！

毎年1月（13日以降の初めての土・日）に行われる「大学入試センター試験」は受験生にとって、とても大事な試験です。国公立大学を志望する受験生はもちろん、私立大学が第一志望の受験生のほとんどが「センター利用入試」でセンター試験を受験します。

受験生はこれまでもすでに対策をしてくれているでしょうが、今からの「センター対策」として何が大事なのか、また、将来の受験生である高1・高2生が今から意識して取り組むべきことは何か、知らないことだけをピックアップして述べていきます。

【受験生の4ステップ】

①センター試験の過去問(2014年度のものが多い)を自分の受験科目全て、時間を計って全力で解く。

国公立大学志望の人は7科目8科目になる人もいると思いますが、全科目全力で時間も正確に測って解いてください。模試ではない、実際の過去のセンター試験で自分が何点取れたのかを知り、第一志望のセンター試験でのボーダーラインとの差を把握しましょう。すでにできている人は②に移りましょう。

②第一志望のボーダーラインとの差を、どの教科で何点埋めるのかを考える。

私立第一志望で3科目受験の場合(配点:英語250 国語100 社会100)、ボーダーラインとの差が50点だったら、英語の長文で落としている20点分とリスニングで10点分、国語と社会で15点ずつなどと現実的な計算をしましょう。基礎力はあるものの実践演習が遅れている科目・単元ほど伸びやすいのです。基礎力がそもそも固まっていない科目・単元が残っている場合は、短期苦手克服に全力を注ぎつつ、受験科目変更を視野に入れて、合格ラインを残された時間で超えることができるのかどうか、現実的な判断をしましょう。

③あらゆる手段で、ボーダーとの差を埋めるための学習を進める。

11月から12月中旬までは、センター対策と個別試験(国公立2次試験)対策を同時並行で行っていきます。主要科目(文系:英語, 国語, 社会 理系:英語, 数学, 理科)の勉強が中心になります。ただ、国公立大学志望で、センターのみで必要な科目(文系の理科, 理系の社会)に苦手科目(得点上昇が期待できる科目)が残っている場合は、この期間に克服する必要があります。

逆に、得意科目(すでに9割程度の得点ができている科目)は、ボーダーとの差を埋める「伸びしろ」がありません。センター対策ではなく個別試験用の学習に時間を振り分けましょう。

まだ解いていないセンター過去問演習, センター対策問題集, センター模擬テストの解き直し, 加えて、これまで使ってきた問題集, 塾のテキストなどで、「伸ばせる科目」のための積み上げをしましょう。

④センター試験演習に1ヶ月間集中する。

センター前1ヶ月になったら、学習時間をすべて「センター試験」のために費やします。残っている過去問や、センター予想問題パック(全教科数回分のパック)などを、時間を計って解き、答え合わせ、間違い直し、穴が見つかった単元の補強を繰り返しましょう。

1ヶ月間それだけに集中することで、センター試験向けの脳に変わり、センター試験で予想以上の(過去最高の)得点をたたき出すことも可能です。

センター模試で、得意のはずの英語で時間が足りずに132点だったAくん。残り1ヶ月の間、時間配分を意識しながら10回分の予想問題の演習をしたことで、本試験で186点取りました。この期間の演習は非常に効果が高いです！

【科目別対策】

①英語

大問4以降の長文読解(配点はほぼ100点)が得点の鍵。わかっているけどミスが出てしまう人は、十分時間をかけて大問4以降を解いてみよう。十分時間をかければほぼ満点がとれる人も少なくないはず。ならば大問3以前をいかに短時間で解けるか(ムダに時間を使わず、わからない問題はスキップ!)をトレーニングしよう。上記のAくんも時間配分を改善して得点を伸ばしました。

②リスニング

筆記の得点はまずまずだが、リスニングが苦手という人は、これからの対策でまだまだ伸ばせます！原因は、知っている単語と発音される単語の音に大きな差があるためです。対策としては「原稿（スクリプト）を見ないでまず聞いて、聞き取れない音を覚えておき、原稿を見ながら聞いて、聞き取れなかった単語の音をしっかり認識する」といった練習を繰り返しましょう。

また、単語と単語のつながりによって発音が変わって聞こえる場合（【例】I have a pen. 「アイ ハブ ア ペン」とは発音されず、「アイ ハバ ペン」と聞こえる）もあるので、上記の方法で音に慣れましょう。

③数学

単元が独立しているので、得意単元と不得意単元がしやすい科目です。数ⅠAは得意だが、数ⅡBだとかなり得点力が落ちるという人も多いようです。不得意単元については、教科書の例題・練習問題・章末問題レベルで解けない問題があるはずですが、まずはそれらをすらすら解けるレベルにすることが先決です。不得意単元をセンター対策問題集などで克服しようと思っても、なかなか成果がでません。まず、教科書に戻って10日で1単元を全問制覇する「短期集中」で克服してしまいましょう。

④国語

現代文、古文、漢文の3科目のうち、受験に必要な科目を受験大学で統一しておくことが、得点を上げる重要な条件です。仮に「第2志望でしか古文（または漢文）が必要ない」場合、その科目の勉強時間が少なくなり自然と低い得点しか取れないということが十分考えられます。

3科目が必要な人で国語の得点を上げたい人は、漢文の克服に時間をかけましょう。他の科目と比較して例年平均点が高く、短時間でそれなりの得点アップができる「勉強しやすい科目」の代表格だからです。

現代文が苦手な人の二大パターンは、1.「問題によって得点率が上下する」 2.「読むのが遅くて全文をきちんと読めない」です。いずれも対策は、「多読ではなく精読」です。得点が低かった問題を読み直し「筆者が言わんとしていることは何か」を考えながら、解き直すことです。他の問題をたくさん解いてもあまり得点力は伸びません。文章内容を正確に把握できるようにするために、あえて同じ文章を繰り返し読み、繰り返し解くことをお勧めします。

[高2・1生]

①高2生の英語

2015年度のセンター試験で「自分の志望校のボーダーラインの8割の得点率を上げる」ために今からセンターを意識して勉強しましょう。

英語は、単語・熟語が全てわかったと仮定して（辞書で全て調べてから解いて）、長文で満点が取れる状態を目指します。文法や基本構文は学校で習っているはずですが、それらが本当に身につけていれば（あとは出題されている単語・熟語の意味が分かれば）、全文を訳すことができ、全文訳すことができれば（センター英語の文章＝日本語の文章という状態にできれば）満点が取れるはずですが、センター英語の長文で、満点が取れない原因が単語・熟語以外にあれば、それ（訳せない文に使われている文法・構文）を克服しましょう。

②高1生の英語

センターレベルの英語を解きこなす力は備わっていないはずですが、今から気をつけておくべきことがあります。それは「発音・アクセント」です。センターの発音・アクセント問題は満点が取りにくく、東大を受験するようなレベルの人でも間違える問題が出題されます。出題される語の数が非常に多く、直前対策がしにくいからです。ふだん目にする英単語の発音・アクセントは完璧にして、間違えやすいものだけは意識して覚えていくという地道な努力が必要です。

③現代文

高3生になってから苦手克服に着手しようと思っていると致命傷を負います。ふだんから受験レベルの文章（有名評論家の文章）に読み慣れていないと、使用される言葉の難解さや文章構成の複雑さに、拒絶反応を起こすようになるからです。現代文では、定期テスト対策と受験勉強の方法が異なるため、受験生になってからの対策開始になりがちです。受験現代文の読み方と解き方、背景となる知識について、いまから（特に講習期間中に）しっかり演習して、受験に備えましょう。

1 大学入試センター試験 出願状況(受付最終日)を公開

大学入試センターは10月9日(木)に受付最終日となった、センター試験の出願状況を公開した。同日17時現在、出願総数は508,561人となっている。前年度の受付最終日(平成25年10月11日(金)17時現在)における出願総数は、529,291人であり、今年度の出願は前年度より下回る結果となった。センター試験は、細かな規則の年毎の変化も多いため、受験生は積極的に情報を集める必要がある。

2 2015年度の国立大学の入学定員 全体では減だが、教育系は175人増

文科省は8月29日、平成27(2015)年度の国立大学の入学定員を発表した。全体では前年比177人減の96,258人。学部別にみると、「社会」75人減、「人文」20人減、「工」7人減、「理」5人減、「農水」5人減、「その他」240人減。一方、「教育」175人増となっている。団塊世代の定年退職などで、国として人材確保が急務であることがその理由である。

3 就職状況 文系と理系の違い

文科省が行っている「学校基本調査」によれば、平成25(2013)年度の大学生の進路では、文系の学生が不安定な職に就いた割合が大きいことがわかる。具体的な数値は以下の通り。
 * 「正規職員でない就職」+ 「一時的な仕事への就職、あるいは進学も就職もしていない者」
 人文科学：28.6% 社会科学：20.6% 理学：15.8% 工学：10.1% 農学：15.4% 保健：9.7%
 ※ 「一時的な仕事への就職」とは、「卒業後、パート、アルバイトなどの臨時的な収入を目的とした仕事に就いたこと」を指す。

4 大学入試改革 求められる英語の「話す」技能

企業だけでなく大学もグローバル化を迫られている昨今ではあるが、イギリスの高等教育専門誌が発表している世界大学ランキングでは、日本の大学は100位以内に2大学しか入っていない。これに対する危機感から、主要大学では、海外から教員を招いたり、学生を留学させる制度を整えるなど、世界での評価を高めようと様々な取り組みを始めている。その影響は英語の入試にまでおよび、従来の「読む」「書く」「聞く」に「話す」を加えた4技能を求める流れが加速している。入試で「話す」力を測定するためには、受験生一人ひとりと面接を実施する必要があるが、何千人(多い大学は数万人以上!)もの受験生と面接するのは時間がかかり過ぎてしまう。そこで、各大学では総合的な英語力があるかどうかを、GTEC for STUDENTSやTOEFL®や英検、さらにはGTEC CBT、TEAPなどをすでに利用あるいはその検討に入っている。

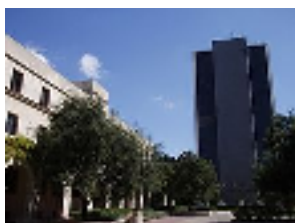
●世界大学ランキング(2014-2015)

順位	大学
1	カリフォルニア工科大学(米)
2	ハーバード大学(米)
3	オックスフォード大学(英)
4	スタンフォード大学(米)
5	ケンブリッジ大学(英)

順位	大学
6	マサチューセッツ工科大学(米)
7	プリンストン大学(米)
8	カリフォルニア大学バークレー校(米)
9	インペリアル・カレッジ・ロンドン(英)
10	イェール大学(米)

順位	大学
∴	
23	東京大学
∴	
59	京都大学

出典: Times Higher Education

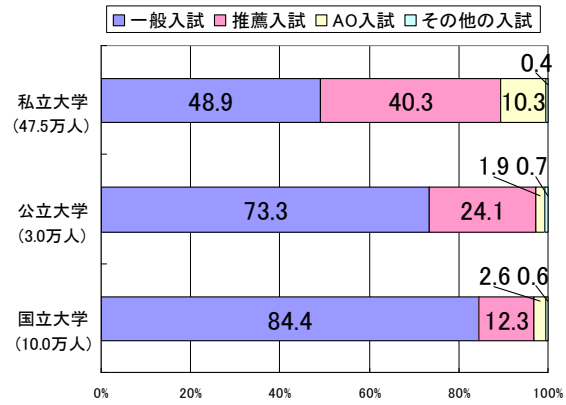
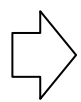
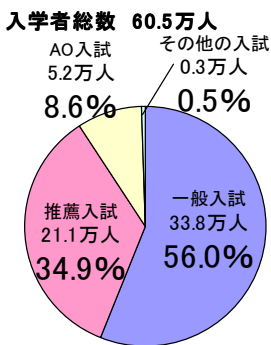


**◇ 大学入試を基礎から知る
第6回 <推薦入試の仕組みは？>**

“入学者の3分の1を占める推薦入試”

「推薦入試」は一般入試に次ぐ規模の選抜方式で、全体の9割以上の大学が実施している。また、「推薦入試」で大学へ入学した人は、国公立大学では約15%に過ぎないが、私立大学では約40%にのぼっている。このように、私立大学においては、AO入試と合わせて、入学者の約半数に占める主要な入試形態となっている。

●2013年度 入試形態別入学者



“指定校制”と「公募制」の2種類あり”

「推薦入試」の定義は「出身高校長の推薦に基づき、原則として学力検査を免除し、調査書を主な資料として判定する入試」となっている。一般入試との大きな違いは、出身高校長の推薦を受けないと出願できないという点である。出願にあたっては、「調査書の評定平均値〇以上」といった出願条件が設定されており、だれでも受験できるわけではない。さらに、多くの私立大学では、大学が指定した特定の高校の生徒を対象にした「指定校制」を採用している。これに対し、出願条件を満たしていれば、どの高校出身者でも出願できるのが「公募制」である。

●指定校制と公募制の仕組み

指定校制推薦	大学が特定の高校を指定して実施する入試方式。「合格率はほぼ100%」という特徴がある。勉強や部活の成績などを評価して、校内選考が行われる。
公募制一般推薦	大学ごとの出願資格を満たして、高校から推薦書をもらえば誰でも受験可能。評定平均値に基準があることが多い。
公募制特別推薦	スポーツや文化活動における実績などが評価される。評定平均値に基準があることは少ない。

“国公立大学の推薦入試”

募集人員が少ない上に、「評定平均値 4.0 以上」など厳しい成績基準を設定している。また、センター試験を課す場合と課さない場合の2タイプに別れ、それにより入試日程も大きく異なる。大学での試験は、面接と小論文が課されることが多く、中には学科に関連した口頭試問や専門的知識を要する小論文を課す大学もある。

“私立大学の推薦入試”

出願条件は国公立大学ほど厳しくなく、特に中部・関西地方には成績基準を設けない大学も多い。選考方法は大学ごとに大きく異なっており、小論文や適性検査、基礎学力試験、面接、調査書等の書類審査を様々な組み合わせたものになっている。一般的な「推薦入試」の他に、各種運動競技に秀でた学生の獲得を目的とした「スポーツ推薦」、資格・技能をもつ受験生を優遇する「有資格者推薦」、生徒会活動や社会・地域奉仕活動、芸術・文化活動で活躍した受験生を対象にした「課外活動推薦」なども実施されている。